

## 芥川龍之介「黄梁夢」試論

謝 銀萍

### I. 序論

芥川作品には、1917年10月1日に『中央文学』に発表した「黄梁夢」がある。この小品は中国の唐の伝奇『枕中記』を基に創作されたことは周知の通りである。「黄梁夢」は短い文章で、それに関する先行研究はさほど多くはない。

「黄梁夢」に関する研究の多くは、『新思潮』（1916年8月1日）に発表された「仙人」や『赤い鳥』（1920年7月1日）に掲載された「杜子春」を論じる文章で付随的に触れられるにとどまっているのが現状である。例えば、山下は「杜子春」の主題を「青年と仙人との対話を通して、“どう生きることが人間的か”」と論じた<sup>(1)</sup>。その上で「青年と死と」<sup>(2)</sup>（『新思潮』、1914年9月1日）、「仙人」、「黄梁夢」や「杜子春」が「創造的な関心の重要な系譜をなしている」と指摘し、「黄梁夢」の「廬生のイメージの延長線」に「杜子春」があると指摘するにとどまっている<sup>(3)</sup>。また、石割は「老年」（『新思潮』、1914年5月1日）、「黄梁夢」と「戯作三昧」という生をテーマとする一連の作品の関係を記してはいるが、「黄梁夢」については「空虚な生を否定する芥川の生に対する決意が昂然と示されている」と触れるだけである<sup>(4)</sup>。

現在、「黄梁夢」に関する先行研究として、建田による「『邯鄲』と『黄梁夢』の比較」と高澤らによる「ゼミナール 芥川龍之介『黄梁夢』——<古典の受け継ぎ>という面から」が最も代表的なものである。建田は、沈既済『枕中記』を典拠とする能「邯鄲」と芥川の「黄梁夢」を冒頭部や廬生像などの面から比較し、「人生とは何によって決定されうか。「邯鄲」はその問題に死をもって応じ、「黄梁夢」は生をもって応じた」と結論づけている<sup>(5)</sup>。高澤らは「古典の受

け継ぎ」、「廬生像の魅力」と「廬生の間人像」という角度から「黄梁夢」について議論を展開し、「芥川文学の始発点にある『青年と死』の〈死生一如〉の想念」は「黄梁夢」では「実人生の問題として具体化していくステップを示した」と論じ、「青年と死と」、「黄梁夢」と「羅生門」の改稿という系列における「黄梁夢」の位置づけを試みている<sup>(6)</sup>。

「黄梁夢」を最も詳しく取り上げたのは単援朝「芥川龍之介・仙人の系譜——「仙人」「黄梁夢」「杜子春」」である。「黄梁夢——仙人への反逆」と題した章で、単は『枕中記』との比較を通し、「反措定によって原話の趣旨を作り変える方法」は芥川の中国物の特徴と結論づけ、「仙人の相対化によって生存苦の超克を求める芥川は敢えて仙人への反逆によって原話の虚無と禁欲の思想を退け、つまらなくとも、現実の人生を力一杯生きたいという内面の叫び声を聞かせる」と締めくくっている<sup>(7)</sup>。

以上の研究は芥川初期の作品系譜を前提として「黄梁夢」の位置づけを捉えようとしている。これらは「黄梁夢」の主題について積極的に生きていこうとする芥川像が読み取られているとはいえ、芥川像を作り上げる社会的あるいは個人的な要素について一切触れていない。また、「黄梁夢」において芥川がいかに典拠を応用し独自のモチーフを絞り出すのかについては、論じる余地がある。さらに、原典『枕中記』との綿密な比較は未だ十分になされていない。そこで本論文では、以上の問題を踏まえ、系統的に「黄梁夢」を考察することを目的とする。「黄梁夢」の創作手法から、芥川の独自のモチーフの演繹や、作品の誕生を促すモチベーションなどを順番に検討してゆく。具体的には原典『枕中記』との比較を踏まえ、芥川の古典創作手法について考察し、そこに内包される独自のテーマ及び関連する社会的、個人的な要素を明らかにする。

本論に入る前に、まず芥川「黄梁夢」の位置づけを検討するため、日中文学における「黄梁夢」関係の作品を整理する。次に、芥川の「黄梁夢」と典拠『枕中記』との比較をする。最後に「黄梁夢」に焦点を当て、芥川の独自のテーマは作品の近代性であることを結論づける。

## II.『枕中記』の系譜と芥川龍之介「黄梁夢」の位置づけ

「黄梁夢」は全文700字弱の短編であり、中国の唐代の沈既済による伝奇小説『枕中記』から作り変えられたとするのが定説である。本節では、『枕中記』に基づく作品を整理し、日中文学における芥川の「黄梁夢」の位置づけを明らかにする。

芥川が参照した『枕中記』は唐代伝奇小説の傑作であり、中国文学及び日本文学に大きな影響を与え、芥川の「黄梁夢」以前にすでに中国のみならず日本でも注目されている。屋敷によると、『枕中記』を踏まえた中国における作品として次の三作が挙げられる<sup>(8)</sup>。元朝の馬致遠作「邯鄲道省悟黄梁夢雜劇」、明朝の湯顯祖改作「邯鄲記」、清朝の蒲松齡著「続黄梁」である<sup>(9)</sup>。これらの作品と原典『枕中記』との相違に関しては、「『枕中記』には老莊思想と道教的な要素両者が内包されている」のに対して、上記の三作はいずれも「道教の靈驗譚という枠組みの中で展開している」と指摘されている<sup>(10)</sup>。一方、日本において『枕中記』に関連する作品としては、芥川の「黄梁夢」以外に、室町時代の『太平記』巻第二十五に「黄梁午炊の夢の事」、室町時代の謡曲「邯鄲」(作者未詳)、江戸時代の恋川春町による『金々先生栄花夢』があると論じられている<sup>(11)</sup>。日本における『枕中記』の受容については、屋敷は「主に老莊的な要素のみに注目して」と明記し、「道教的な要素がすっぱりと抜け落ちてしまった」<sup>(12)</sup>と結論づけた。

以上の研究は詳細なデータを提供しているが、本稿では、『枕中記』に影響を受けたとされている、未だ着目されていない作品を付け加えたい。まずは、『枕中記』と同時代の唐朝の李公佐によって書かれた「南柯太守伝」と、明の湯顯祖が作った戯曲「南柯記」と「邯鄲記」が挙げられる。この三つの作品は『枕中記』の話と類似しており、影響を受けていると推測できる。次に、日本文学では上記以外に『太平記』巻第二十六「従伊勢進宝剣事付黄梁夢」で、黄梁夢の話が引用されており、その源泉にあるのは『枕中記』だとされる<sup>(13)</sup>。このほか、近代以降に影響を受けた作品としては、芥川の「黄梁夢」以外に、1920年に発表された野上弥生子の戯曲「邯鄲」がある。また、1950年に雑誌『人間』10月号に

掲載された三島由紀夫の戯曲「邯鄲」は能の「邯鄲」を翻案したものであり、『枕中記』の系譜に納められると考えられる。このように日中文学を整理してみると、『枕中記』と関わっている作品は近代以前に多く見られるにもかかわらず、近代以降は少ない。翻案した戯曲はあるものの、近代小説としては芥川の「黄梁夢」しか挙げられない。そして、『今昔物語集』を活かして近代的なテーマを表したように、中国古典『枕中記』の文学的価値の上に芥川の「黄梁夢」が成り立っていることは無視できない。屋敷は芥川の「黄梁夢」が「『枕中記』の系譜を引く話の新たな展開の可能性を示している」<sup>(14)</sup>と指摘している通り、近代小説としての芥川の「黄梁夢」は文学史において大きな意味を持つ。そこで、『枕中記』がいかに近代小説「黄梁夢」へ生成していくのか、そのプロセスが問われる。

ただし、「黄梁夢」の典拠とされる『枕中記』についてはまだ補足しなければならない点がある。その一つは、『枕中記』とほぼ同様の内容でありながら、題名の異なる小説が存在している点である。『枕中記』はその題名で『文苑英華』巻第八百三十三「寓言」に収録されている<sup>(15)</sup>が、北宋に成立した説話集『太平広記』巻第八十二「異人」部には「呂翁」という題名で収められているのだ<sup>(16)</sup>。両者の微妙な違いの例として、冒頭部にある物語の年代が挙げられる。『文苑英華』では「開元七年」となり、『太平広記』では「開元十九年」となっている。本稿では、『枕中記』沈既済と明記している『文苑英華』を使用する。

また、『枕中記』にも典拠があるとされている。屋敷の論文によると、それは「六朝志怪小説集『幽明録』所収の話を元に著したもの」<sup>(17)</sup>である。『幽明録』は南朝の劉義慶（403年-444年）及びその弟子により編著された説話集と考えられる。原本はすでに散逸しているため、『幽明録』に所収されているどの話がもとになったのかについては諸説ある。そして、『太平広記會校（附索引）』巻第二百八十三に「楊林」という題名が見られる。その内容は以下の通りである。

宋世，焦湖廟有一柏枕，或云「玉枕〔一〕」。枕有小坼。時單父縣人楊林為買客，至廟祈求，廟巫謂曰：「君欲好婚否？」林曰：「幸甚。」巫即

遣林近枕邊，因入坼中，遂見朱樓瓊室。有趙太尉在其中。即嫁女與林。生六子，皆為秘書郎。歷數十年，並無思歸之志。忽如夢覺，猶在枕傍。林愴然久之。出《幽明錄》〔二〕

### 【校記】

〔一〕玉 沈本作「玉惋」

〔二〕《太平寰宇記》卷一二六《搜神記》、《幽明錄》、《廣博物志》卷三九所引《幽明錄》引有此條。《北堂書鈔》卷一三四所引《幽明錄》，文字可與本條相發明：

焦湖廟祝有柏枕，三十餘年，枕後一小坼孔。縣民湯林行賈，經廟祈福，祝曰：「君婚姻未？可就枕坼邊。」令林入坼內，見朱門，瓊宮瑤台，勝於世。見趙太尉，為林婚，育子六人，四男二女，選林秘書郎，俄遷黃門郎。林在枕中，永無思歸之懷，遂遭違忤之事。祝令林出外間，遂見向枕，謂枕內歷年載，而實俄忽之間矣。<sup>(18)</sup>

「楊林」は『幽明錄』によるものであることが、その本文の最後に記されている。この話は様々な書物の中で見ることができる。特に校記によると、「楊林」が『廣博物志』卷第三九が引用した『幽明錄』の中に入っているとされている<sup>(19)</sup>。類似の説話は『北堂書鈔』卷第一三四に収録された『幽明錄』にも見られると記している。『景印文淵閣四庫全書』第889冊に収録されている『北堂書鈔』<sup>(20)</sup>を確認したところ、「楊林」は卷第一三四で「枕二十六」と題してあることが分かる。

いずれも写本のため、話の内容はやや異なる。沈既済の『枕中記』が参照した原典は上に挙げた作品に違いないと推測される。この仮説が正しければ、『幽明錄』にあった夢の話は『枕中記』を始め、日本における『枕中記』に関する作品にも影響を与えている可能性は否定できない。このように、南朝の『幽明錄』から唐の『枕中記』へ、また芥川の近代小説「黄梁夢」へ変容するプロセスが示唆される。

### III.「黄梁夢」と『枕中記』の比較

本節では、芥川「黄梁夢」と沈既済『枕中記』との比較を通して、芥川龍之介はいかに古典を作り変えたのか、原典の内容の捨象をいかに行ったのかを明らかにしていく。

#### 1. 物語の語りについて

まず、両者は語りの構造が異なる。「『枕中記』は語り手が始終視点を取り、物語を語るという構造になっている」<sup>(21)</sup>とされている。これに対して、「黄梁夢」は冒頭の部分以外は主に問答の形を取って展開されている。特に夢の内容については、原典では第三者視点で語られているのに対して、「黄梁夢」では呂翁の間に答えて、盧生が自ら回想して語ることとなる。語り手との距離を置いて問答という形で作中人物に発声させることによって、より物語の客観性が生じる。そのため、第三者に語られる『枕中記』より、「黄梁夢」のほうが信憑性が高まるのであろう。

次に、語りの順序が異なる。『枕中記』は「時主人方蒸黍」<sup>(22)</sup>や「主人蒸黍未熟」<sup>(23)</sup>という表現を使い、夢の前、夢の中、夢の後と区切り、時系列に従って出来事の展開を示している。一方芥川の「黄梁夢」では、夢に入る前の状況説明が完全に削除されている。冒頭部にて、目覚める直前の盧生がいきなり描かれているのだ。そして回想という形で、夢の中へと話が展開していく。このように、語りの順序は時間の流れとは逆行して語られている。この語りの順番について、単は芥川が原話の起承転結にある〈起〉に当たる部分を捨象し、〈転〉に相当する部分を冒頭とし、夢の内容である〈承〉を短縮し、会話の構造へ改変すると論じている<sup>(24)</sup>。『枕中記』の冒頭部は原作の旨を理解する上で欠かせない部分だと言える。なぜなら、そこに物語の発生時間、登場人物呂翁と盧生の出会いに関する説明、またなぜ盧生に夢を見させたのかという理由など肝心の点が描かれているからである。この冒頭部の大胆な削除は芥川の独創であり、「黄梁夢」の近代性に関わると考えられる。この点については次章で詳しく検討する。

また、単は「出会いの場面の捨象は、題名のように、芥川の関心が「夢」にあることを示している」<sup>(25)</sup>と述べている。単の指摘によるならば、夢の内容の変更についても考察すべきなのではないか。ゆえに、この点についても次節で検討する。

## 2. 夢の内容について

芥川の「黄梁夢」では原典の冒頭部を完全に欠いていることは先に指摘した。本節では、原典にはある夢の内容に関する細かい描写も数多く削除されたことを確認する。

『枕中記』では、夢の内容が大部分を占めて詳しく記されている。その夢の内容を通して、「夢の中で得意から失意へ失意から得意へと二転三転変化し、成功者としての歓喜と失敗者としての落胆が走馬燈の如くこの身に廻ってきた末に現実社会に戻った」<sup>(26)</sup>廬生像が読み取れる。一方、芥川の「黄梁夢」では夢の内容が原典より簡略化されている。廬生は監察御史<sup>(27)</sup>や起居舎人<sup>(28)</sup>、知制誥<sup>(29)</sup>から吏部侍郎<sup>(30)</sup>に栄転し、戸部尚書<sup>(31)</sup>に昇進、御史大夫<sup>(32)</sup>を兼任したところまでは原典の援用である。しかし、そこから中書門下平章事<sup>(33)</sup>と昇進する前に、「当時の宰相に忌まれて、流言でもって中傷され、端州刺史に左遷された」<sup>(34)</sup>という廬生の一回目の失意が削除されている。つまり、原典で二回の失意があったのに対して、芥川の「黄梁夢」では一回に改変されている。

また、廬生が各官位に就いてからの所為や心理変化などの描写は原典に詳しく描かれている。特に、二回目の讒を被った時の廬生の心理描写が着目に値する。廬生の心理描写は以下のように見られる。

だが、同僚が彼を傷つけた。今度は、彼が辺境の將軍たちと結託して謀叛を企てたという誣告であった。上諭によって下獄したのである。

府吏が従卒をひきつれて彼の屋敷に到着し、急いで逮捕した。彼は、不測の事態に驚愕して、妻子に向かって言った。

「わたしは、山東の出身で、五頃の畑を持ち、飢えや寒さをしのぐに充分で、わざわざ禄を求める必要もなかった。いま。このさまになつては、あらい毛織りの短い衣を着て、黒い小鳥に乗り、邯鄲へ向かう道を旅したくても、とても出来ぬのだ」

彼は剣を抜いて、自害しようとした。<sup>(35)</sup>

廬生は二回目の讒を被り、役場の凶悪を知り、立身出世を後悔し自殺しようとする。ここでの描写に大きな意味がある。なぜなら、この廬生の所為が『枕中記』の趣旨である「道教の虚無思想と禁欲思想を反映する教訓談」<sup>(36)</sup>を一層明らかにするからだ。「黄梁夢」では、このような立身出世に伴う激しい転落、それに伴う主人公の心理変化などが描かれていない。『枕中記』において寵辱窮達の心理は細かく描写されていたのに対して、芥川の「黄梁夢」に至っては、形式的な官名が並べられるにとどまっている。

### 3. 夢の後の描写について

「黄梁夢」と『枕中記』の最も大きな違いは物語の結末である。

『枕中記』では夢の中で廬生は波瀾の人生を体験し、各時点の心理変化が激しく描かれていた。例えば、夢から目覚めた後、呂翁に改めて念を押されたところ、廬生は自ら悟ったという筋書きである。また、呂翁が仙人であることは『枕中記』の冒頭に説明されている。「榮達の夢を抱きながら叶えられぬことに苦しむ若者廬生」<sup>(37)</sup>をその苦しみから解き放つことが神仙呂翁の使命である。つまり、『枕中記』の中で呂翁はその使命を達成している。一方、「黄梁夢」では、廬生が自ら悟った内容は呂翁によって語られる。自ら生の意味を悟った廬生は、受動的な立場に回されるようになってきているのだ。このような改変によって、最終場面の芥川の独創が特徴的となる。

『枕中記』の最後の場面では、廬生が自分なりに「生きる」ことへの悟りを口にし、呂翁に感謝の気持ちを話した後その場を去る。しかし「黄梁夢」では、呂



翁の説教に対して、「夢だから、猶生きたいのです。あの夢のさめたやうに、この夢もさめる時が来るでせう。その時が来るまでの間、私は真に生きたと云へるほど生きたいのです。あなたはさう思ひませんか」<sup>(38)</sup>と、盧生は言い返す。呂翁をあきれさせるという正反対の結末で話が締めくくられる。

『枕中記』での案内役だった呂翁は、「黄梁夢」になると説教者に変身したイメージが強い。同様に、仙人の信徒のような盧生の姿も受動的な存在と変わった。原典では仙術を持つ道士という呂翁の身分が明記されており、これにより『枕中記』の道教的な要素が浮き彫りにされ、神仙対凡人という二項対立が生じる。ところが「黄梁夢」においては、呂翁に関する説明が道士にとどまり、「不老不死の仙人」<sup>(39)</sup>という従来の解釈が成り立たない。このように、原典に比べると、生きることへの個人的な理解を押し付けようとする呂翁は説得性が低い。ここには、原典とは正反対の結末を示す芥川の独創が窺えると言える。

ここまで『枕中記』と「黄梁夢」の比較を行ったが、次に先行する「楊林」を踏まえてどのような違いがあるのかを見てみる。『枕中記』の典拠とされる「楊林」は『今昔物語集』と同様に、「曰く」で始まる説話である。その内容はごく簡素であり、ただの事実の叙述だけである。黍を蒸すといった時間を表す表現や詳しい夢の描写、心理描写などは一切ない。その点でこの小文には、芥川がよく言う『今昔物語集』の野生な美と通じるものがあり、創作する余地が高い素材である。沈既済はかなりの手を加え、ありきたりの説話から寓言のような小説に作り変えた。そして、芥川により新たな創作が加えられ、近代性を帯びる「黄梁夢」が誕生した。ただし、沈既済の著した『枕中記』は唐の時代の色彩が強いため、濃厚な時代的制約があり、現代の読者にはさほど共感されないのではないか。その意味において、創作において再び手を加えた芥川の「黄梁夢」は、芥川独自のテーマを内包して現代的な生命力に溢れている。

#### IV.「黄梁夢」の近代性

前章では芥川の「黄梁夢」と『枕中記』との相違点を指摘した。本章では、上

記の相違点がそれぞれ作品の理解にどんな影響を与えるのか、また「黄梁夢」を創作する際に、芥川は時代性をどの程度、またどのように取り入れているのかについて検討してみる。具体的には、人物の造形や時代の雰囲気の出演方法を押さえながら考察を試みる。

## 1. 「黄梁夢」の時代性について

「黄梁夢」の時代性について、夢の中に出てきた官名以外に時代を識別できる描写は少なく、時代の雰囲気が曖昧である。白話文で書かれているため、どんな時代でもあり得る話である。厳密な時代制限がないため、この小品はいつでも読者の共感を起こす可能性を保っている。また「黄梁夢」においては、主人公盧生の身分に関する説明も特にない。これによって、一般的な青年としての盧生像は成り立つ。これらの効果は、原典にあった夢の前部分を削除したことによる。

さて、原典『枕中記』の冒頭部に当たる夢の前の内容を見てみよう。

開元七年、道士有呂翁者、得神仙術、行邯鄲道中、息邸舍、掇帽弛帶、隱囊而坐、俄見旅中少年、乃盧生也。衣短褐、乘青駒、將适于田、亦止于邸中、與翁共席而坐、言笑殊暢。<sup>(40)</sup>

開元七年、呂翁という道士は、仙人になる奥義を会得した者で、邯鄲へ向う道中、とある宿屋に泊り、帽子をとって、衣の帯をゆるめ、荷物にもたれて休息した。

ふと若い男が見えた。盧という書生であった。ごつごつした毛織りの短い衣をまとい、黒い小馬に乗り、畑へ行く途中であったのに、宿屋に泊ったのである。呂翁と同じむしろに坐り、上機嫌に談笑していた。<sup>(41)</sup>

この段落は物語の時間、場所や人物について語っている。「開元7年」という時間は時代背景の説明そのものである。開元は唐の玄宗の年号であり、開元7年

は日本の養老3年（719年）に当たる。「衣短褐，乘青驹，将适于田」という描写から、農夫である盧生の身分が推測できる。そして、「士之生世，当建功树名，出将入相，列鼎而食，选声而听，使族益昌而家益肥，然后可以言适乎。吾志志于学，富于游艺，自惟当年青紫可拾。今已适壮，犹勤畎亩，非困而何？」<sup>(42)</sup>という盧生の言葉が続く。時代背景を踏まえると、立身出世を志している中国古代によくある若者像がありありと伝わってくる。科挙に及第し、国の官吏になるという中国古代の若者ならではの抱負が内包されており、『枕中記』が生まれる唐その時代の雰囲気か漂っている。農夫でありながらも、官吏になろうとする盧生の志はその時代の若者に共通する「欲」なのである。

しかし、このような濃厚な時代的色彩を抱える盧生像は、芥川の「黄梁夢」ではすっかり書き換えられている。まずは夢の前の内容を完全に削除することによって、物語の時間と場所が曖昧になり、時代の制約を越えて普遍性を持つストーリーとなっている。特に、上に引用した原典の対談は最も重要なコンテキストである。なぜなら、それは呂翁が盧生に夢見をさせる理由そのものであり、後の盧生の身に起きた二転三転の夢話に繋がり、作品の主題にまで関わっているからだ。したがって、原作の冒頭部を捨象することによって、原典を貫く立身出世という盧生の欲が果たす機能が失われる。空虚な人生を悟らせるという原作の主題は「黄梁夢」に引き継がれない。また、原作にあった詳細な夢のスケッチも相応に短縮する必要が生じる。つまり、時代的なテーマである立身出世という前提を不要とするから、前後が呼応して、人生の失意と得意を繰り返す経験の夢の内容が重要ではなくなる。このように、時代が強く投影されていた盧生のイメージは、「黄梁夢」の中では薄められていると考えられる。

当初「楊林」では、主人公は楊林という名を持つ商人であった。彼の願いは官吏ではなく、良い婚姻を手に入れることである。商人から農夫への改作により、沈既済はこの粗末な説話を生かし、時代の色彩を被らせ、優れた伝奇小説へ変身させた。丁寧な時代背景描写があるからこそ、科挙制度が流行した封建社会の読者に共感を起こし、作品のテーマである人生の無常を実感させたのであろう。し

かし、『枕中記』にあった時代設定は近代市民社会とは相容れないものである。特に、科挙制度は中国ならではの文化コードである。そのため、読者は一定の歴史知識を持たなければ、小説を読んでも理解し兼ねるところがあるだろう。つまり、科挙制度が身近でない日本の読者は、この小説に共感しにくいと思われる。

冒頭部分を削除し、主人公の身分を伏せることにより、一般の青年である盧生像が成立する。また、原典『枕中記』の展開に肝心な時代背景の説明を捨象することにより、「黄梁夢」の近代性がより浮き彫りになる。芥川の創作を経て、物語は特定の時代性を持つ伝奇から、一般性を持つ近代小説になる。さらに、この冒頭部の捨象は「黄梁夢」の結末にある芥川自身の創作に関連していると考えられる。

## 2. 呂翁と「黄梁夢」の結末の意味

前節までで「黄梁夢」における原典の冒頭の削除と、夢の内容を簡潔している効果を確認した。続いて、原典の結末を作り変えるという芥川の改作が、いかに「黄梁夢」の趣旨に関わってくるのかを考察する。

前述の通り、『枕中記』では夢の前、中、後という順番で語られ、夢の内容に関する描写が大部分を占めている。これに対して、「黄梁夢」では語る順番が変わり、夢の後から始まる。この改作により、原典とは異なり、夢から目醒めた後盧生と呂翁の間に交わされた会話を中心となってくる。原典で盧生が自ら悟った話が呂翁の口を借りて言い聞かせられることにより、盧生の受動的な立場が明らかとなる。「生きる」と云ふ事は、あなたの見た夢といくら変わつてゐるものではありません。これであなたの人生の執着も、少しは熱がさめたでせう<sup>(43)</sup>と、呂翁は語る。これに対して、盧生は真剣に生きていきたいと反論している。結末にある生きることをめぐる二人の会話が作品の中心であり、生に対する思考は「黄梁夢」の主題だといえる。一方、『枕中記』では失意した人々を慰め、欲望を捨てさせる無虚思想がテーマである<sup>(44)</sup>。夢の中で盧生の願いが実現し、官吏ならでの一生を経験できた盧生の姿が詳しく記されている。夢をここまで徹底する

理由は、廬生が「立身出世」という欲を抱いているからであると考えられる。夢の中で彼の欲を満たすことにより、「立身出世」に悩まされずに生きていける趣旨が内包されている。

それに対して「黄梁夢」は、時代の制約にとらわれず、「立身出世」という欲を完全に切り捨てている。芥川が生きている時代からすれば、『枕中記』にあったテーマは時代遅れであったに違いない。「黄梁夢」の結びに記された廬生の人生観こそ、芥川がもっとも読者に伝えたいことだと考えられる。つまり、生きることへの示唆そのものである。

生きることが儚いことであり、人生への執着が冷めるはずだというのはあくまで道士呂翁の考えである。原典では、廬生が立身出世という志に悩まされながら日々を過ごしているため、呂翁は仙術を使い欲望から廬生を解放させた。けれども、「黄梁夢」の廬生は特に何かの悩みを抱いているわけでもないのに、いきなり若者が持つ生への情熱を冷やす呂翁の行為は反省すべきだと思われる。特に呂翁の「得意らしく鬚を撫でた」という描写からは、自惚れの老人像が印象付けられる。呂翁のような人物は、芥川作品において生徒に押し付けをするような教育者の面影として描かれている。芥川作品における同様の造形を窺わせる人物の例として、1916年に発表された「酒虫」の蛮僧が挙げられる。「酒虫」の主人公は健康で家産を持つ劉大成という酒好きな男である。いくら酒を飲んでも酔わないのである。ところがある日に、素性の知れない蛮僧に、これは病気で腹の中に酒虫がいるからだと言われた。そこで、劉は蛮僧の言いなりになって治療を受ける。その結果、家産をなくすとともに健康も衰えてしまうのだ。この蛮僧のような面影を呂翁にも窺うことができる。そして、「黄梁夢」の場合、呂翁への批判的な視線が読み取れる。呂翁の言いつけに傲然と言いつけす廬生の行動は、盲目に蛮僧を信じ込む劉大成の行為への反省として理解できよう。廬生は年配者の忠告に対して、「青年らしい顔をあげて、眼をかがやかせながら」、このように答えた。

夢だから、猶生きたいのです。あの夢のさめたやうに、この夢もさめる時が来るでせう。その時が来るまでの間、私は真に生きたと云へるほど生きたいのです。あなたはさう思ひませんか。<sup>(45)</sup>

「酒虫」の劉大生とは違い、廬生は自分の意志を徹底し自身の考えを持っている。彼は生きることに對する執着が冷めるどころか、却って湧いている。この点が原典とは全く逆の反応であり、芥川のオリジナルである。廬生の行為は「酒虫」の劉大成に対する反措定と受け止められるだろう。

夢の中で人生の榮達得喪を経験した廬生が却って生への執着を徹底していることから、人生はたやすく見抜くべきものではなく、この先にある未知の波瀾やチャレンジこそ人生の意味そのものであるという作品の旨が伺えるのであろう。輝いている廬生の眼に映るのは希望の光りであり、人生への情熱である。夢を通して人生の無常を知った上での決意だからこそ、真剣に生と向き合うと考えられる。さらに、生への廬生の情熱は理性的なものである。なぜならば、彼は死を意識すべきと示唆しているからだ。「この夢」がさめる時はおそらく命が尽きる時、つまり死のことを指すのであり、ここには死の到来を認識した上で真面目に生き抜いていくという廬生の覚悟が顕在化している。このような廬生の人間像について、沼田は「青年と死と」と結びつけ、「死を前提として生を考え、倦怠に苦悩して生きている青年A」を乗り越え、「個の自覚において主体的に自分の人生を歩いていこうとするメンタリティーのすがすがしさとして映ってくる」と論じている<sup>(46)</sup>。このように、結末の変更により、近代性を帯びる廬生の人間像が浮き彫りになり、近代作品としての「黄梁夢」が位置づけられる。

「黄梁夢」において、芥川は廬生像の再構築や結末の改変を通して、「生きることとは何か」という新しいテーマを示した。このような新しい廬生像に、「人生の執着ないしは人間の欲望を是とするとところに、現実の人生にこだわる芥川の姿が見えてくる」<sup>(47)</sup>と指摘されるように、青年廬生に自分の人生観を重ねる芥川の姿勢が伺える。すなわち、死を覚悟した上で、未知の人生に希望や夢を持ち、自

分なりに生きぬいていこうとする前向きな認識を、芥川は「黄梁夢」を通して訴えようとしていると考えられる。

## V. 盧生から芥川へ

「生きることは何であるか」という問いは芥川文学の大きなテーマである。「青年と死と」や「仙人」といった数多くの作品が着目されているが、生への態度を徹底する芥川の態度は「黄梁夢」に最も率直に表れているのではないか。『帝国文学』に掲載された「羅生門」（1915年11月1日）や『新思潮』に発表された「鼻」（1916年2月15日）において、芥川は人間の根本にあるエゴイズムをクローズアップし、人間の暗い一面を暴こうとしている。これに対して、「黄梁夢」からは現実を直視し真に生きていこうとする心境を伝える芥川の一面が伺える。さて、このような積極的な信念を表す作品の誕生を促す契機は何であったのだろうか。

高澤らは「大正期の現実を生きる芥川世代だからこそつかみ得た、全く新しい青年盧生の像だったのではないか」と社会的な視点から、「黄梁夢」の誕生の可能性を指摘した<sup>(48)</sup>。山上は「大逆事件以後の冬の時代を倦怠につかまれながらも」、その「抵抗としての、大正デモクラシーを作り出そうとする芥川世代の声」の代弁だと論じている<sup>(49)</sup>。確かに先行研究が示したように、時代の要素が大きな牽引力として作動しているに違いない。けれども、社会的な影響以外に、創作当時の芥川の身边を振り返る必要があるだろう。そのため、本章では「黄梁夢」が発表された1917年前後の芥川の身边事情に焦点を当てる。

芥川の年譜<sup>(50)</sup>を概観すると、「黄梁夢」に関する特別な項目も見られない。しかし、細部にわたって検討すると、芥川の生活への勢いを促す原動力として、以下のできごとが深く関わっていると思われる。まずは、芥川の身分の変化である。1916年夏に彼は大学を卒業し、社会人として活躍しはじめる。しかも、憧れの存在である夏目漱石と同じく、学校の教職に就いている。芥川は学生から社会人へと変わったばかりでなく、同時に学生から教師になる。このような新しい

環境に囲まれている青年芥川にとって、新しいスタートを切り開く契機に違いない。次に考えられるのは小説集『羅生門』の出版である。これは芥川の第一小説集であり、同年の5月に阿蘭陀書房から出版された。6月27日に日本橋レストラン鴻ノ巣で、その出版を祝う『羅生門』出版記念会が開催されたのである<sup>(51)</sup>。文壇の同志に認められることが芥川に大きな力をもたらしたことは想像に難くない。新人作家として順調な日々を過ごすことは、芥川文学の多彩な可能性を促したと考えられる。また、前年に山本喜誉司の姪、塚本文との婚約が決まっており、熱い恋に落ちていた芥川の充実した精神も伺えよう。後の1918年2月2日、田端にあった自笑軒にて、芥川は塚本文との結婚式を挙げた。作家生活の順調、私生活の幸せとあいまって、若い芥川にとって1917年はめでたいことの多かった一年で、希望にあふれる一年でもあったのだろう。

「黄梁夢」以外に、1917年に「偷盗」（『中央公論』、4月1日・7月1日）、「さまよへる猶太人」（『新潮』、6月1日）、「或る日の大石内蔵之助」（『中央公論』、9月1日）などの名作が発表された。その中で、一番明るい基調で書かれたのは、恐らく小品「黄梁夢」であろう。上述の1917年前後の芥川の身に起きたできごとを振り返ってみると、まさに希望に満ちている日々である。小さな出来事でありながらも、その好調な生活ぶりは「黄梁夢」の誕生とは無縁ではないと考えられる。この時期に生活に情熱を燃え、真に生きていきたいという芥川の想念は、「黄梁夢」に託されているのではなかろうか。

## VI. 結論

本稿では系統的に芥川の小品「黄梁夢」を考察した。はじめに日中文学における『枕中記』を基にした作品をまとめたところ、芥川の「黄梁夢」が唯一の近代小説として位置づけられることは確認できた。そして原典『枕中記』との比較を通して、時代性に富んだ中国伝奇小説から普遍性を持つ近代的作品へと変容させた芥川の古典創作手法を考察した。芥川の独創によって、廬生の知的な青年像が成り立ち、死を意識しながら現実に向き合って生きていくべきだという近代的な



テーマが見事に表現されている。

1917年10月に発表された「黄梁夢」は、芥川文学においてそれほど有名であるとは言えないかもしれないが、1920年代にはすでに中国の知識人に注目され、中国語に翻訳されている<sup>(52)</sup>。時代や国境を超越し、同時代の中国人を魅する理由は、恐らく「黄梁夢」を貫く前向きな人生観や溢れる生气にあったであろう。「黄梁夢」は短い作品とはいえ、積極的に人生を考えるモチーフは、青年期の生き生きとした芥川の姿を彷彿させる。また、テキスト自体は困窮に直面している青年を励ますよい材料として、原典を遥かに超える現代的な意味に満ちている。

芥川文学の全体を見渡すと、廬生のような青年像を扱う作品は「黄梁夢」以外に、「青年と死と」、「仙人」や「杜子春」などが挙げられる。本稿では、「黄梁夢」に焦点を当てて同じく『枕中記』を出典とする系譜に注目して論じてきたが、芥川文学内での生を論じる作品群における「黄梁夢」の位置づけや意味を考察することは今後の課題として重要である。

## 注

- (1) 山下、25頁。
- (2) 原論文では『青年』（大正3年）と書いてある。本稿では全集によるものである。
- (3) 山下、25-26頁。
- (4) 石割、15頁。
- (5) 建田、10-12頁。
- (6) 高澤他、42-47頁。
- (7) 単、84-87頁。
- (8) 屋敷、100-110頁を参照。
- (9) 三作品のあらすじについては同上を参照。
- (10) 屋敷、106頁。
- (11) 屋敷の論文を参照。あらすじについては同論文を参照。
- (12) 同上、110頁。
- (13) 邱、18-26頁に詳しく紹介されている。

- (14) 屋敷、110頁。
- (15) 『景印文淵閣四庫全書』第1341冊、1988、257-259頁。
- (16) 同上第1043冊、1988、423-425頁。
- (17) 同上、101頁。
- (18) (宋) 李昉等編、4686-4687頁。
- (19) 『景印文淵閣四庫全書』第981冊、1988、304頁を参照。ただし、校記の補足にある『太平寰宇記』卷第一二六にあったことが確認できなかった。
- (20) 『景印文淵閣四庫全書』第889冊、1988、674頁を参照。
- (21) 単、85頁。
- (22) 日本語訳は「折から、宿屋の主人が、黄粱の飯を蒸していた」(今村訳、26頁を参照)。
- (23) 日本語訳は「主人は、依然、黍を蒸していて、まだできていなかった」(同上、31頁を参照)。
- (24) 単、86頁。
- (25) 同上。
- (26) 邱、20頁。
- (27) 監察御史は唐代、中央政府の監察と司法の機構である御史台の属員であり、秩正八品上である(今村訳、209頁)。
- (28) 官名であり、皇帝の言行と朝廷お政令大事を記録、起居注を編写して史館にわたして国史編集の素材を提供する(同上)。
- (29) 聖旨の起草を扱う職務である(同上)。
- (30) 吏部は唐代の尚書省に属し、尚書省六部の第一であり、侍郎はその副長官で、秩正四品上である(同上、211頁)。
- (31) 全国の財政、民政、戸籍などの事務を管轄する戸部の長官であり、秩正三品である(同上)。
- (32) 御史台の長官である(同上)。
- (33) 唐代、宰相の代わりに呼称である(同上、212頁)。
- (34) 今村訳、28頁。
- (35) 同上、28-29頁。
- (36) 単、86頁。
- (37) 屋敷、102頁。
- (38) 芥川、289頁。

- (39) 西原、15頁。
- (40) 竹田他、13頁。
- (41) 今村訳、25頁。
- (42) 竹田他、13頁。  
 学問をする者が、この世に生をうけた以上、科擧に及第して名をあげ、あるいは武将、あるいは文臣として最高位をきわめ、食事には候、卿、大夫のように鼎をならべる贅をつくし、抱えの歌妓を吟味していい音楽を聴き、一族を繁栄させ、家産を裕福にさせてこそ、はじめて愉快と申せるのではありませんか。僕は、かつて学問に志し、さまざまな学芸を習得しました。そのころは、高位高官になるのは地面に落ちている物を拾うようなものと自負していましたのに、いま、壮年になりながら、相変わらず畑仕事におわれているのは、困窮でなくなんでしょうか？（今村訳、26頁）
- (43) 芥川、288頁。
- (44) 山下、25頁。
- (45) 芥川、289頁。
- (46) 沼田、46頁。
- (47) 単、87頁。または、石割は「黄梁夢」からは「芥川の内奥を貫いている熱情、漫然と死に至る空虚なる人生を超克したいという願う芥川の祈念が読み取れよう」（15頁）と、積極的な芥川像が内包されることを指摘している。
- (48) 高澤他、44頁。
- (49) 山上、45頁。
- (50) 『芥川龍之介全集』第24巻96-107頁を参照。
- (51) 同上、100-101頁を参照。
- (52) 1927年に、中国の文人謝六逸により翻訳され、『小説月報』18巻9号に掲載されている。のちに、単行本などに再三収録される。

## 参考文献

- 芥川龍之介（1995）『芥川龍之介全集』第1巻、岩波書店。
- .（1995）『芥川龍之介全集』第2巻、岩波書店。
- .（1996）『芥川龍之介全集』第3巻、岩波書店。
- .（1996）『芥川龍之介全集』第6巻、岩波書店。
- .（1998）『芥川龍之介全集』第24巻、岩波書店。
- 石割透（1987）「芥川龍之介——中期作品の位相（2）芸術家意識の定着「女體」から「戯作三昧」へ」、『駒沢短大國文』17、15-29頁。

- 今村良志雄訳（1988）『唐宋伝奇集（上）』、岩波書店。
- 邱鳴（1991）「『太平記』における中国故事説話の方法——黄梁夢説話についての考察を中心」、『都大論究』第28号、18-26頁。
- 高澤健三・山下明・山上英男・沼田朱実（1988）「ゼミナール：芥川龍之介『黄梁夢』：〈古典の受け継ぎ〉という面から」、『文学と教育（文学教育研究者集団）』第146号、42-47頁。
- 竹田晃・佐野誠子・黒田真美子（2006）『中国古典小説選2 搜神記・幽明録・異苑他（六朝I）』、明治書院。
- 建田和幸（1999）「『邯鄲』と『黄梁夢』の比較」、『橘香』第44巻第11号、10-12頁。
- 単援朝（1992）「芥川龍之介・仙人の系譜——「仙人」「黄梁夢」「杜子春」」、『稿本近代文学』第17号、80-92頁。
- 湯頭祖著、徐朔方箋校（1999）『湯頭祖全集』第4冊、北京古籍出版社。
- 野上弥生子（1981）『野上弥生子全集』第14巻、岩波書店。
- 西原千博（2005）「芥川龍之介作品解釈事典（二）」、『札幌国語研究』第10号、9-20頁。
- 増田正造（1989）「近代文学と能37——野上弥生子2『京之介の居睡』『藤戸』『邯鄲』付・芥川龍之介『金春会の隅田川』『黄梁夢』」、『観世』第56巻第7号、56-61頁。
- 三島由紀夫（2002）『三島由紀夫全集：決定版』第21巻、新潮社。
- 屋敷信晴（2007）「特集 日本庶民文芸と中国 唐代伝奇と日本文化——「枕中記」の受容をめぐる」、『アジア遊学』第105号、100-110頁。
- 山下明（1984）「芥川と児童文学——『蜘蛛の糸』から『杜子春』へ——」、『文学と教育』第127号、19-27頁。
- （宋）李昉等編、張國風會校（2011）『太平廣記會校（附索引）』第11巻、燕山出版社。
- 「芥川龍之介專輯」（1981）『小説月報影印版』第18巻第9号、書目文献出版社。
- 『景印文淵閣四庫全書』第889冊（1988）、驪江出版。
- 『景印文淵閣四庫全書』第981冊（1988）、驪江出版。
- 『景印文淵閣四庫全書』第1043冊（1988）、驪江出版。
- 『景印文淵閣四庫全書』第1341冊（1988）、驪江出版。
- 『太平記：3』（1997）『新編日本古典文学全集』第56巻、小学館。

## A Study of Akutagawa Ryunosuke's *Kōryōmu*

XIE, Yinping

This study examines the short story *Kōryōmu* (1917) by Akutagawa Ryūnosuke (1892-1927), a famous writer in Taishō-period Japan. Previous studies on *Kōryōmu* are scarce and for the most part has focused on situating the work within the early Akutagawa canon. Although previous scholars have identified in *Kōryōmu* the theme of living proactively, they have neither addressed the factors which may have affected the writer himself, nor made a detailed comparison between *Kōryōmu* and *The World Inside a Pillow*, a Chinese classic upon which the short story is based.

This paper is a systematic study of Akutagawa's *Kōryōmu*. First, in order to contextualize *Kōryōmu*, I attempt to summarize the literary works based on *The World Inside a Pillow* in both Chinese and Japanese literature. Next, I compare *Kōryōmu* with *The World Inside a Pillow* in detail and attempt to discern how Akutagawa reinterpreted classical literature in *Kōryōmu*. Finally, I seek to determine what made Akutagawa's adaptation of the classics possible.

*The World Inside a Pillow* had a deep influence on the literature that came after (especially pre-twentieth-century literature). Although there are many literary works based on *The World Inside a Pillow*, only Akutagawa's *Kōryōmu* can be considered a modern novel. This gives *Kōryōmu* an important standing in literary history. Akutagawa, skilled at rewriting the classics, omitted the historical elements found in *The World Inside a Pillow* and gave *Kōryōmu* a new, modern ending. Akutagawa reworked the theme, as well. The protagonist Rosei tells us that life is not an empty dream and conveys the worth of living life to the fullest

while maintaining an awareness of death. Considering the relationship between Rosei and Ro-ō, I found that *Kōryōmu* is related to *Shuchū* (1916), another Akutagawa's works. Examining Akutagawa's life leading up to 1917, I discovered three important events that may have contributed to *Kōryōmu*: first, Akutagawa graduated from student to member of society; second, *Rashōmon*, his first collection of short stories had been published that year, meaning that he was admitted to the literary world; lastly, he was engaged to be married the previous year.

Although *Kōryōmu* is quite short, it nonetheless manages to convey a genuine way to live in its protagonist Rosei, a new breed of hero. In 1927, it was translated into Chinese due of its uplifting theme. I argue that, due to Akutagawa's creativity, *Kōryōmu* surpassed the classic upon which it was based and became a work full of significance for modern times.